

2014年8月10日 主日礼拝

説教 「天からのほしご」

創世記 28 章 10-22 節

【変えられたヤコブ】

アブラハムはよくできた人のイメージ。けれども孫のヤコブは、自己中心。兄と父をだまして、長男の権利と祝福を奪い取った人物。ところが、神さまはこのヤコブを見捨てません。そればかりか、彼をイスラエルと名付けます。ヤコブからイスラエルへ。それは、ヤコブが神さまによって造り変えられていく道のり。今日の個所は、そのための神さまの取り扱いの始まり。始まった道のりを歩み通させてくださるのは神さまです。その大きな愛を、思い巡らし、深く味わいましょう。

【天からのほしご】

怒る兄エサウから逃げたヤコブは野宿することになりました。悲しみと失望の中にあるヤコブ。元はといえば、全部自分のせいです。けれども、その罪あるヤコブを神さまはあわれんで、夢でヤコブに語られました。ふしぎな天からの「ほしご」(12)です。神さまの世界は恵みの世界。今、ヤコブがいる世界は、孤独と罪の世界。ヤコブにはどうにもならない断絶に、神さまがハシゴをおろしてくださいました。ヤコブをあわれんで。

【かたわらに立つ神さま】

「そして、見よ。【主】が彼のかたわらに立っておられた」(13)。神さまはご自分から、なんの期待もしていないヤコブに現れてくださいました。裁くためにではなく、祝福するために。その祝福は、「あなたがどこへ行っても…わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない」(15)とある無条件、無期限の祝福。

私たちは罪人。しばしば、神さまに向き合うことができず、たがいに愛し合うことを忘れる。神さまはそんな私たちを手放さない。たとえ、私たちがこのさき、どんな罪の中に迷い込んで行くとしても、どんなに神さまから遠い場所に入りこんで行ったとしても、「あなたをこの地に連れ戻そう」(15)とおっしゃる。「私はけっしてあなたをあきらめることはしない」とおっしゃる。神さまのあわれみは、私たちが条件を満たしたら、祝福するというような、たよりないものではない。どこまでも私たちを追いかけてくる祝福です。ユダヤ人は、神さまの祝福は獵犬のようだと考えているのだそうです。神さまは決してあきらめない。私たちを祝福せずにはいられないお方なのです。

【祝福の基に】

ヤコブが諸国民の祝福の基となるために、神さまは、ヤコブを変えてくださいます。この後、ヤコブの生涯は労苦に満ちています。

叔父ラバンのもとで苦しみ、二人の妻との家庭生活の中で苦しむ。晩年にいたっても、エジプトに売られたヨセフのことで悩む。けれども、それは神さまがいないから苦しんだものではありません。そのような苦しみの中で、神さまは、ヤコブのそばにいて続けてくださった。そして、ご自身のあわれみを知らせた。ヤコブの生涯は苦難の生涯、その中で、ますます深く神さまのあわれみを知った。神さまをますます深く知り、そして自らもあわれみの器、祝福の器に変えられていく生涯。

【インマヌエルの神】

ヤコブのかたわらに立っておられた神、インマヌエル(神は私たちとともにおられる)の神。どこでもいつでもかたわらに立ってくださっている神さま。そのために神が人となってくださった。主イエスは神。そして、主イエスは十字架に。罪人に寄り添い、罪人のために十字架に。それほどまでの愛。それほどまでの祝福。ご自分を与えるインマヌエルの神を私たちは知っている。

ヤコブは、神さまに感謝せずにいられなくなって、石の柱を立て、ささげものをするを誓いました。私たちも自分をささげる。礼拝のたびに、献金する。それは私たちの献身のしるし。私たちはそうしないではいられないから。そのように変えてくださったのは、神さまです。